

欧米系諸国の雑穀見聞録

木俣美樹男（植物と人々の博物館）

A Record on Millets in European and North American Countries based on My Experiences

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

1. はじめに

大方の日本人は雑穀を遅れた作物、貧しい人々の作物、最近では健康食品などと、昔の「日本の貧農民」がやむなく食べていた穀物という偏見をもって見ているようだ。しかし、夏作の雑穀類は縄文文化の系譜を継承し、冬作の麦類とともに、第2次世界大戦後までは、山村では多くの家族の主要な食糧であった。雑穀と称されるイネ科穀物は世界各地に多く栽培されており、地域によっては決してマイナー穀物ではない。しよせん、日本は極東の島国で、ほとんどのものを大陸からの伝播に頼ってきた。栽培植物でも、日本起源のものは蕎麦や山葵など、ほんの少ししかない。

意外ではあろうが、キビやアワはヨーロッパでは、8500年ほど前から栽培があった。もちろん、日本に伝播するよりも古い時代のことである。ドイツからスイス、イタリア、ウクライナ、ロシア、ルーマニア、ギリシアに至るヨーロッパの主要雑穀はキビとアワであった。南部ではトウモロコシ、北部ではジャガイモが新大陸から伝播して以降、雑穀はこの500年ほどで急激に栽培が減少したようだ（Jones 2004, Werth 1937）。

それならば、現代の栽培状況はどうなっているのか、知りたいところである。欧米諸国では雑穀調査を主目的に行ったことはない。環境学習の調査、国際学会への参加、研究専念期間や観光旅行などで訪れた際に、博物館、美術館、大学、植物園、市場などを巡って、片手間ながら雑穀を観察してきた。したがって、雑穀栽培農家を訪れる機会には恵まれなかったが、このささやかな観察記録を書きとどめておきたい。

なお、おおよその記憶では、訪問先はイギリス（3回、約10か月）、デンマーク（2回、約2週間）、ドイツ（3回、約3週間）、フランス（2回、約2週間）、オーストリア（1回、約1週間）、オランダ（2回、約2週間）、スペイン（1回、約1週間）、ベルギー（1回、約1週間）、ロシア（2回、約2週間）、およびカナダ（3回、約2週間）、アメリカ（約10回、約3か月）、オーストラリア（2回、約2週間）である。

ヨーロッパで栽培されてきた雑穀は、イネ科のキビ、アワおよびマナグラス、タデ科のソバである。また、新大陸で起源した雑穀はイネ科のサウイ、マンゴ、ヒユ科のセンニンコク、アカザ科のキノアである。

2. 植物園巡り

1) ドイツ

ドイツには、環境教育・学習調査（1996年6月）および観光旅行（2013年8月、2015年6月）で訪問している。

①ボン大学植物園：イネ科栽培植物20種ほどが近縁野生種とともに栽培展示されていた。キビ、アワ、ヒエはそれぞれ2系統ずつ栽植してあった。伝統的なコムギ畑が再現してあり、ヒナゲシやムギセンノウなどの随伴雑草も混在していた。

②ベルリン自由大学植物園：ボン大学植物園以上の広い敷地を有し、多くのイネ科栽培植物の栽植展示があった（写真1）。キビやアワも見られ、特にキビは15cmほどで開花し始めている個体と、25cm以上に生育しながら未開花の個体が混在していた（6月、木俣1996）。

③ハイデルベルグ大学植物園：キャンパス内の



写真1：ドイツ、ベルリン自由大学植物園の麦畑の生態展示、畑の中にはヒナゲシなど多くの随伴雑草が混ざっている。

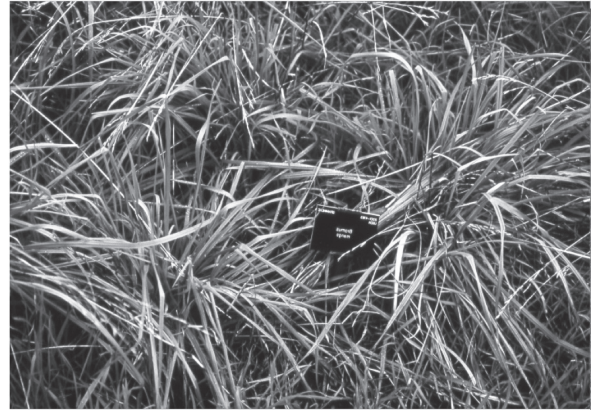


写真2：イギリス、キュー植物園イネ科の庭に植えられている南米起源のイネ科雑穀マンゴ。



写真3：イギリス、エデンプロジェクトのイネ科穀物の生態展示、ヒエ、アワ、サマイ、コドラなど各地の雑穀が植えられている。



写真4：フランス、ルーアンのホテルの飾り、花瓶にはアワが活けてある。



写真5：カナダ、バンクーバーの花壇、紫色のトウジンビエが植栽してある。欧米ではイネ科植物が装飾に使用されることも多い。

④フランクフルトのパルメンガルテン：アマランサスが花壇に植栽されていた。

2) イギリス

①キュー植物園：イネ科庭園の種まく人像の足元には世界中の麦・雑穀が植えてある。イギリスでは雑穀類は食べてこなかったが、植物学的な公正さで世界中のイネ科穀物が展示してある。南米のイネ科穀物マンゴは絶滅寸前である(写真2)。東京学芸大学で保存していた雑穀種子は、東日本大震災後の計画停電および放射性物質による汚染を回避するためにキュー植物園に移管した。

②エデンプロジェクト：イギリス南西部のコーンウォールにミレニアムプロジェクトとして2001年に創設された。面積15ha、熱帯降雨林と温帯のバイオームがあった。3000種以上の植

植物園の規模は小さく、その一角にイネ科栽培植物の植栽された区画があった。雑穀類は見られなかった。

物が植えられている。来訪者は年間200万人以上（2004年）。現在はさらに砂漠のバイオームなども充実している。観光施設として見せる植物園であるが、植物の保存もしている。世界の雑穀類の展示、インド起源のコドラなども植栽されている（写真3）。国際イネ年の展示では、注連縄と日本のイネが大きなモニュメントとして展示されていた。アワ穀粒を成型した小鳥の巣箱も販売していた。

3. 市場巡り

1) ドイツ

①ベルリン：市内の路上観察をしていた際に、自然食レストランの窓辺に、1穂のキビがコムギやエンバクの穂に混ざって飾ってあったので、翌日の夕食をここで取り、穂の入手経路やキビ料理について聞いてみたが、何ら情報は得られなかった。

②フランクフルト：飲食物に関する本を専門に扱っている書店があり、雑穀料理に関する小さな本が一冊あった（Hertling 1988）。栽培史や栄養学の記述の後に、多くの種類の料理法が掲載されていた。特にかゆ料理が多かったので、ユーラシア全域におけるつながりを示唆していると思った（木俣 1996）。スーパーマーケット WESE では、ウクライナ産とドイツ産のキビ Gold millet, Hirse を販売していた。カフェのテーブルの花飾りには、野生のキビ属の穂が活けてあった（2015）。

③ミュンヘン：キビの畑らしいものを1か所、非耕作地にキビらしい1個体を見た。

④ビュルツブルク：スーパーマーケットではイタリア産のキビや中国産のアワを販売していた。イタリア産のキビには精白ができていない30粒ほどの種子が混ざっていたので、小金井市と小菅村で播種したところ、よく発芽し、生育した。

2) フランス

ルーアン：ホテルのレストランの活け花にアワを使用していた（写真4）。

3) スペイン

①バルセロナ：高級スーパーマーケットに行くと、雑穀類ではキビ、ソバ、アマランサス、キノアが販売されていた。

②グラナダのスーパーマーケットでは雑穀は見られなかった。

4) アメリカ

①ヨセミテ国立公園：ミュージアムショップでは、アメリカマコモ（ワイルドライス）を売っていた。先住民に採集特権があるようだ。

②ホノルル：カイルアのスーパーマーケットではキビを売っていた（2014）、カハラのスーパースーパーマーケットではキビやテフを販売していた（2015）。

5) カナダ

バンクーバー：スーパーマーケットではキビやキノアなどを販売していた（2014）。市内の植え込みには装飾用のトウジンビエが植栽されていた（写真5）。

6) オーストラリア

大学に研究用としてアワとキビを送った。

4. 保存団体

1) ネイティヴ・シーズ・サーチ（Native Seeds/SEARCH）はアメリカ合衆国アリゾナ州のツーソンにあるNPO団体である。メキシコなどの先住民の在来栽培植物在来品種の現地保全と施設保全を行い、販売もしているが、イネ科雑穀ではサウイの保存を行っていた。これらをめぐる生物文化多様性の保全に努力している

2) オーストラリアのファントン夫妻の活動 Seed Savers で種子保存の研修を受けた日本人も多い。

5. おわりに

欧米においては、雑穀に関するフィールド調査を行う機会がもてなかった。考古学文献の調査のために、イギリスのケント大学で研究専念期間を取り、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、

キュー植物園、カンタベリー大聖堂図書館などを訪問した。幾人かの雑穀研究者に直接話を聞くことができ、考古学分野の視野が広がった。これにより、キビの起源と伝播の研究に関して一応のまとめを得ることができた (Kimata 2016)。

稲作単一民族説のような偏狭さにとらわれな
いで、植物学の立場から公正に雑穀の研究を進
めていきたいものだ。縄文時代終晩期以来、雑
穀によって命をつないできた日本民族がなぜ雑
穀を軽視するのか。とりわけ、第二次世界大戦
中やその後の食糧難の時に雑穀栽培は増加し、
どれほどの人々が飢えから救われたことか。

現代の健康食ブームとしてではなく、民族の
歴史からも、広く世界の見聞をふまえて、考え
直したい。

引用文献

- Hertling, W. 1988, Kochen mit Hirse, para-verlag, Darmstadt.
- Jones, M. 2004, Traces of ancestry: studies in honour of Colin Renfrew, McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, Cambridge.
- 木俣美樹男 1996、ドイツの雑穀、雑穀研究 9 : 6-7.
- 木俣美樹男 2015、ドイツ散訪、<http://www.milletimplic.net/>
- Kimata, M. 2016. Domestication and dispersal of *Panicum miliaceum* L. (Poaceae) in Eurasia. *Ethnobotanical Notes* No.9 : 52-65.
- Werth, E. 1937, Zur Geographie und Geschichte der Hirsen. (Zur Geographie und Geschichte der Kulturpflanzen und Haustiere. XIII), *Angewandte Botanik* 19:42-88.